



「随処為主」

筆者は大学に勤めているが、5年ほど前から、「アクティブ・ラーニング」という言葉を耳にする機会が増えた。「アクティブ・ラーニング」は、講義とは異なり、学修者の「能動的」な学習への参加を取り入れた学習法の総称であると教員研修で教わったが、講義形式であろうと、学修者が能動的に講義内容を理解しようとしないと成り立たないので、何かモヤモヤした感じが残ったのを覚えている。ことさら、「能動的」という点を強調しなくても、学んだことを知識として利用するには、何らかの能動的要素は含まれていると思ったからだ。しかしながら、ここ数年、「アクティブ・ラーニング」の一つであるチュートリアル教育の運営に関わるようになり、最初に感じた「アクティブ・ラーニング」に対するモヤモヤ感が、自分の中では少し整理されてきたので、ばいお・ふおーらむに寄稿させていただいた。

我々の大学のチュートリアル教育は、6名程度の学生にチューターと呼ばれる担当教員1名を加えて行っている。チューターは、基本的には学生の学習内容には口を出さない。学生らは与えられた課題（学生に問題点を自ら見つけさせるきっかけになる短い会話）から、グループディスカッションにより推測される様々な問題点や疑問点を抽出する。その後、教科書、図書館の参考書、インターネット等を利用した自己学習を行ってもらい、再集合後、自己学習の結果を踏まえたグループディスカッションで問題を解決していく授業となっている。

運営に加わる以前に、何回かチューターとしてチュートリアル教育に参加したことがあったが、学生はグループ

ディスカッションを活発に行いながら問題解決を進めていた。そのことから、講義形式ではない、チュートリアル教育を、ほとんどの学生が肯定的にとらえているのだと考えていた。ところが、運営側になり学生の授業評価を確認すると、「もっとチュートリアル教育で学びたい」、逆に「チュートリアル教育なんて必要ない」という両極端な意見が、講義形式の授業と較べて明らかに多いことに気が付いた。そこで直接、学生に聞いてみたところ、授業評価が大きく分かれてしまう理由の一端が見えてきた。肯定的な意見を持つ学生の多くは、チュートリアル教育の課題に対して「自ら」問題を発見し、「自ら」の知的好奇心を満たすというモチベーションを持って問題解決に取り組んでいる。その結果、学習は自分のために行っていることを意識できる。それに対して、否定的な意見を持つ学生は、自分自身は課題に興味はないが、授業だから問題を解決するという姿勢で取り組んでいると思われた。そのため、自分のための学習であることを認識できず、授業に対する不満を感じるのだと考えられる。積極的にグループディスカッションに参加し、自己学習もしっかり行っている学生であっても、否定的な意見を持つケースもあり、非常に驚いた。

どうやら、「アクティブ・ラーニング」の「能動的」な学習においては、学修者「自ら」、学習内容や解決すべき事柄を決定するというプロセスが重要であると考えようになった。また、チュートリアル教育の運営に当たっては、学生が「自ら」解決したいと思えるような課題を設定することが必要であると気づくことができた。

この「自ら決定する」というプロセスは、研究活動においても重要である。特に大学院生や若手の研究者の皆さんには、研究テーマや実験の方向性を、「自ら決定する」ことを意識してもらいたい。「自ら研究テーマを決定している」ことが、データが中々出ないなどの困難にぶつかった際に、モチベーションを維持する上で非常に役立つと筆者は日々感じている。

(いしがきもち)